～司馬遼太郎の小説「俄」のモデル～

異色の社会事業家・小林佐兵衛の足跡

高木　昌之

【目的】

2023 年（令和 5 年）は司馬遼太郎生誕 100 年である。その司馬遼太郎が幕末明治の大阪を舞台に活動した侠客・明石屋万吉の人生を描いた小説が『俄(にわか)―浪華遊侠伝』である。主人公のモデルは小林佐兵衛。“侠客”＝現在の“反社会的勢力”と見做されがちだが実は決定的な違いがある。伝記では美化されているとは言え、彼の行動の裏には常に「～のため」という大義が存在していた。その生き様の全てを肯定できないものの、社会基盤や社会福祉制度が未整備な時代に一私人として消防や生活困窮者の救済などに取り組んだ社会事業家という側面があったことだけは否定できない。“世のため人のために尽くした”小林佐兵衛の足跡を辿り、その存在を改めて見直す。

【内容】

今回の研究のきっかけは、宝塚聖天にある「慈侠窟」という小堂に安置された佐兵衛翁の巨大な木像との出会いだった。なぜここに、という疑問から始まった。

佐兵衛の人生は大阪で完結する。元幕臣の長男として生を受けるが、父親に振り回されるかたちで不幸に見舞われ、母と妹を食べさせるために僅か 9 歳ながら自らの意思で家出し賭場荒らしを始める。その後は、播州小野藩より大坂の河川警護のため武士に取り立てられたり、米相場を崩壊させたり、波乱万丈の人生を送ることになる。

やがて、消防請負制の導入にともない、大阪府知事の要請を受け、府内の消防における「北の大組頭取(おおぐみとうどり)」に就任。自主的に火事の罹災者を自宅に保護するなどの活動にも取り組み、後年、北の大火から大阪天満宮の社殿を守ることにつながっていく。

また、自らが窮乏するまで私財を投じ、浮浪者や生活困窮者に教育・職業訓練を行い社会復帰・自立を支援する「小林授産場(じゅさんじょう)」を運営する。

こうした佐兵衛の活動の足跡で目に見える形で残るものはほとんどないが、今回の研究の中で場所を特定し辿っていく。

【結果】

小林佐兵衛の足跡のほとんどは、現大阪市北区および中央区内に限られる。ただ戦災のダメージが大きい地域で、しかも一私人としての活動が主だったため施設等で残るものはないが、佐兵衛の存在を証明するかのように名前が刻まれた燈籠や碑が僅かながらも残っている。大阪ではないが彼を顕彰すべく高野山や宝塚に墓や像が残されている。また、佐兵衛の思いを伝える施設として「大阪市立弘済院」がある。

今回の成果として、これらを地図に落とし込み、小林佐兵衛の業績を偲ぶための一助とする。

１．「俄 浪華遊侠伝」の主人公のモデル

宝塚聖天 慈侠窟
小林佐兵衛像

司馬遼太郎は『俄―浪華遊侠伝』で、「ワイの一生は一場の俄や」という伝説の侠客の生き様を描いている。父親の逐電により、数え十一歳で一家を養わねばならなくなった明石屋万吉は、賭場を荒らし、「殴られ」て日銭を稼ぐ。それで莫大な金をもうけ、遊侠として名をあげ、最後には慈善事業につくすという破天荒な男の一代記で、場当り的に生き抜く様を「俄」に例えたのである。この主人公こそが小林佐兵衛（1830～1917）である。

入れ墨は入れず、また暴力に訴えるのではなく暴力に耐えることで名を上げた異例の侠客で、どつかれ屋となったのは貧しい家族を支えるためであり、米相場破りをしたのも米相場の高騰で苦しむ貧民のためであった。

そして、世のため人のために生きる佐兵衛の真骨頂とも言えるのが、消防活動と社会事業への貢献であった。

２．消防活動への参画

1873 年（明治 6 年）、消防請負制の導入にともない、当時の大阪府知事・渡邊昇の要請を受け、府内の消防における「北の大組頭取」に就任した。自主的に火事の罹災者を自宅に保護するなどの活動にも取り組んでいた。

その 36 年後の 1909 年（明治 42 年）に発生した北の大火（天満焼け）では、当時 79 歳の佐兵衛が防火活動を率いて大阪天満宮を火から守ったという。放水するが風下で屋根まで届かなかったため、佐兵衛が率いる消防夫たちが建物の屋上にのぼり、濡れたむしろを敷きつめ、延焼を免れたのである。大阪天満宮の社殿がいまだ健在なのは、まさに彼のおかげと言っても過言ではない。

佐兵衛の大阪天満宮への信仰心は篤く、大工門（北門）脇の大燈籠の基礎石には「小林佐兵衛」の名が刻まれている。

また、高野山の奥の院、小林佐兵衛墓所に、消防殉職者の慰霊の碑がある。石碑には、「大阪各消防殉職者精霊供養塔」とあり、裏面に「明治四十五年三月建立大坂北小林佐兵衛」とある。

３．「小林授産場」の運営

小林佐兵衛が人生に置いて最も力を入れた事業が「小林授産場」の運営であった。

（１）小林授産場の誕生まで

元々慈善心の強い佐兵衛は、焼け出された幼児を自宅に引き取ったり、長町、上町、福島、北野などに住む貧しい人々に毎夜白粥を施したりしていたが、1882 年（明治 15 年）頃に北野小松原町に私立授産場「小林授産場」を創立した。当初の収容者は 6 歳から 14 歳までで“孤児院”としての性格が強かったが、1885 年（明治 18 年）12 月 19 日に建野大阪府知事の認可を得て、大阪府が旧幕時代からの「お救い所」を継承し運営していた粉川町の「救育所」を合併して以降、その役割は大きく変質する。警察、役所を通じて入所した浮浪者や生活困窮者に教育・職業訓練を行い、社会復帰・自立を支援した。また、病人や身体障害者も収容した。ひとの窮状をほっておけない佐兵衛は、経営困難で閉鎖されたばかりの池上雪枝の感化院の入所者も受け入れた。

1894 年（明治 27 年）頃に訪れた新聞記者の横山源之助は、「大阪市民に最も名を知

られ、かつ市の公共事業にも多少の交渉あるを以て、ある意味にては大阪市の慈善事業を知るに最も恰好なるものあるが如し。」として小林授産場を訪れ、「家は水田涼しき間に建てられ、前より見れば、何人の住居やらんと思わるるまでに建築厳かなり。入りて世話人と称する若者と語る。現時入場し居る人数 82 名あり、うち 15 歳以下なるは 50 人、他は 15 歳以上にして、また 56 歳の老人も居れり。このうち 55 人は某工場の燐寸軸並に従事し、年長者 20 人は大阪市中の便所掃除に従事し、別に市中の橋梁掃除に従い居るもの 7 人あり。他は授産場の炊事にもっぱらなるものと、北区真砂町の小林氏が本宅の用を弁じ居るものとなり。」と記している。具体的な賃金、労働時間、休日、食事等についても聞き出し、その後内部を視察したが、この施設の生活環境についてはやや批判的に表現されている。

（２）北野牛丸町への移転拡張

入所者の増加により手狭となったため、1894 年（明治 27 年）9 月に北野牛丸町に約 10 万円（現在約 1 億円ほどか）をかけて新施設を建設し移転した。

大阪相撲興行においては、黒岩組（脱走力士の集団）と大阪相撲との和解に尽力した縁から、1898 年（明治 31 年）には「頭取押尾川」を襲名し、大阪相撲のトップとなる総理に就いた。1901 年（明治 34 年）には、授産場への資金援助を名目とする「寄付大相撲」を行った。

1903 年（明治 36 年）に第 5 回大阪内国勧業博覧会が開かれた際には、入所者が一躍 397 人と、1895 年（明治 18 年）の 198 人から約倍に増えた。これは、警察が、各国から来る旅客等に対する体裁から、大阪中のホームレスやスリの身柄を確保して小林授産場へ入所させたためである。

（３）財団法人弘済会への施設売却

1872 年（明治 5 年）～1873 年（明治 6 年）頃には、米相場で巨額の富（約 50 万円）を築いた佐兵衛だったが、明治末には授産場の運営のためそのほとんどを失った。

北の大火の跡の翌年の 1910 年（明治 43 年）3 月、小林授産場は窮状に陥り、これに見かねた有識者たちは、「小林佐兵衛翁に代わり大阪市の仁人義士に愬う」との一文を公にしている。発起人として、当時の大阪府知事高崎親章、大阪市長池上四郎、朝日新聞社主村山龍平、毎日新聞社主本山彦一などが名を連ね、金原明善、金森吉二郎が発起人代表となる。「小林佐兵衛翁に代わり」では、佐兵衛の人柄について語り、大阪市において授産場が果たした役割を評価し、富豪の責任を強調し、広く社会の協力を求めている。

翌 1911 年（明治 44 年）、佐兵衛は、「小林遊園地」を含め相当あった資産をさまざまな事業に使い果たし、授産場の運営が困難となったため、大阪市に授産場の収容者、土地、建物を引き取って欲しい趣旨の請願書を提出する。請願書には、大阪市北区北野牛丸町 40 番地　建築請負業者私立小林授産場主とある。

1912 年（大正元年）12 月 17 日、財団法人弘済会（大阪市立弘済院の前身）に土地建物の一切を 4 万 8 千円で売却し、入所者 100 人も引き取ってもらった。

４．その他現在も残る小林佐兵衛の足跡

中之島の東洋陶磁器美術館の東側にある「木村長門守重成表忠碑」には発起人として元大阪府知事の西村捨三とともに小林佐兵衛の名が刻まれている。安治川に取り残されていた大阪城石垣用の巨石を引き上げ、当時中之島にあった豊国神社前に据えたのが佐兵衛である。

長柄墓地（大阪市設北霊園）には小林佐兵衛の墓がある。墓石の外柵に「北小林若

中」と「瓢箪」の刻印があり、墓石手前の燈籠には、それぞれに「酒井種子」とある。酒井種子は佐兵衛の二女で、佐兵衛の跡継ぎとなった酒井栄蔵の妻である。

大阪以外では、高野山奥の院にも墓所があり、子分たちが建立したという「浪花侠客小林左兵衛」の銅像があったが戦争に供出され既に失われており、侠骨碑、小林佐兵衛翁歌碑、大阪各消防殉職者精霊供養塔、小林授産場斉縁無縁之霊の碑が残る。同じく高野山にある小林佐兵衛の菩提寺・櫻池院には、佐兵衛の名が刻まれた石標が残る。

宝塚聖天には、酒井栄蔵が建てた「慈侠窟」があり、内部には本研究のきっかけとなった佐兵衛の木像や米寿の記念写真を安置する。なお、この 3 メートル近い巨像は高野山にあった銅像の型である。

別紙「小林佐兵衛の足跡地図」にこれらの情報を落とし込んでいる。

５．終わりに

小林佐兵衛は僅か百余年前まで生きていた人物であるが、一私人でありまた侠客であることから、その正確な足跡を辿ることは難しい。しかしながら今なお佐兵衛の思いを伝える施設は残っている。吹田市で特別養護老人ホームや附属病院を運営している「大阪市立弘済院」である。

大阪市立弘済院

1909 年（明治 42 年）に発生した「北の大火」の際の御下賜金と市民等からの義捐金の残額を基金として 1912 年（大正元年）8 月に設立され、同年 12 月に「小林授産場」を買収した「財団法人弘済会」の事業を、1944 年（昭和 19 年）4 月に大阪市が引き継いだ際に設立されたのが「大阪市立弘済院」である。大阪天満宮への延焼を防いだ「北の大火」と全財産をつぎ込んだ「小林授産場」という佐兵衛がまさに命を懸けた２つの活動・事業が引き継がれている訳である。

現地に行っても佐兵衛との関連を示すものは何も残っていないが、1911 年（明治 44 年）御下賜の勅語の中にある”施薬施療以て済生の道を弘めんとす”の御句から戴いた「弘済」の二文字を、佐兵衛から引き継いだ時と変わらず今も守り続けていることに感謝したい。

ただその「大阪市立弘済院」も、2012 年（平成 24 年）6 月に打ち出された「府市統合本部における弘済院の基本方向性」に従い事業継承（民間移譲）が進められ、その役目を終えようとしている。

◆参考文献等

「大阪朝日新聞」（1909）大阪朝日新聞社、「大阪春秋第 6 巻第 1 号通巻 16 号」（1978）大阪春秋社、「大阪春秋第 6 巻第 3 号通巻 18 号」（1978）大阪春秋社、司馬遼太郎『俄―浪華遊侠伝（講談社文庫）』（1972）講談社、横山源之助『日本の下層社会』（1949）岩波書店、『北區誌』（1955）大阪市北区役所、『大阪現代人名辞書』（1913）文明社、三善貞司編『大阪史蹟辞典』（1986）清文堂出版、佐々木克編『それぞれの明治維新』（2000）吉川弘文館、宇田川文海・長谷川金次郎『大阪繁昌誌』（1898）東洋堂、寅垣内すが「大阪を中心とする社会事業の歴史」（2001－2010）、大阪市福祉局「弘済院の今後の方向性について」（2013）
今日の景色 https://ameblo.jp/kazu3wa1192/、ぐるりん関西 https://gururinkansai.com/、ウェルおおさか https://wel-osaka.com/index.php 、大阪市立弘済院 https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/page/0000436513.html、神社専門メディア 奥宮－OKUMIYA－https://okumiya-jinja.com/ 、東寺真言宗 宝塚聖天 七宝山了徳密院 <http://www.ryomitu.com/index.html>

2023 年 3 月 25 日

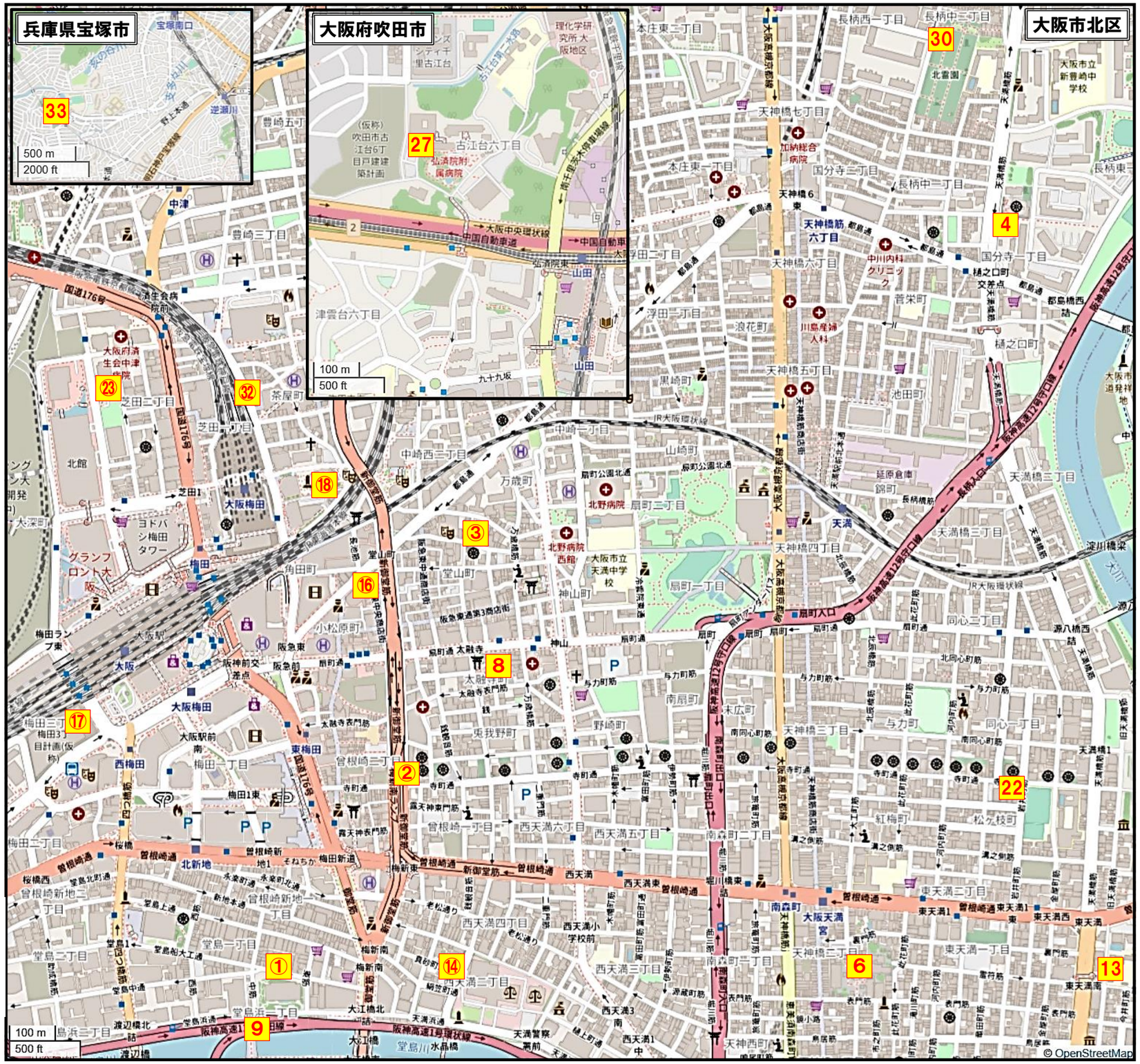
「異色の社会事業家・小林佐兵衛の足跡」地図（１）

大阪公立大学　大阪検定客員研究員　高木 昌之

①	質店「明石屋儀左衛門」 （堂島中町船大工町） 1830 年（文政 13 年）0 歳	3 月に出生。
②	寒山寺 1834 年（天保 5 年）4 歳	両親が祖父から離縁され寒山寺隣家に転居。
③	北野村 1836 年（天保 7 年）6 歳	8 月の火事で村役人の世話で転居。
4	正徳禅寺 時期不明	幼時に小僧として入寺。 以後、同寺の檀徒。
6	大阪天満宮 ①1840 年（天保 11 年）9 歳 ②1874 年（明治 7 年）44 歳 ③1909 年（明治 42 年）79 歳	①初めての賭場荒らし。 ②大燈籠寄進。 ③「北の大火」から社殿を守る。
8	太融寺 1845 年（弘化 2 年）15 歳	表門南に居住。
9	堂島米市場 ①1852 年（嘉永 5 年）22 歳 ②1911 年（明治 44 年）81 歳	①共謀して米価を引き上げる仲買に殴り込み。 ②米相場高騰で苦しむ人々のため乗り込み。
13	長州藩屯所 1869 年（明治 2 年）39 歳	呼び出しを受けるも、幕末に長州藩士を助けたことで罪に問われず。滝川小学校に「川崎東照宮跡」の石碑あり。
⑭	真砂町 1873 年（明治 6 年）43 歳	居住。付近に「旧町継承碑」あり。
⑯	小林授産場（小松原町） 1885 年（明治 18 年）55 歳	私財を投じ創設した私立授産場で、同年府知事の認可を受ける。
⑰	梅田ステーション 1887 年（明治 20 年）57 歳	チャリネ大曲馬興行の大阪における興行元を務める。
⑱	小林遊園地 1888 年（明治 21 年）58 歳	凌雲閣の南にあった佐兵衛経営の庭園で銅像も当初はここに設置された。
22	感化院 1891 年（明治 24 年）61 歳	小林授産場は池上雪枝が開いた感化院からも彼女の没後受け入れた。「池上雪枝感化院跡」の石碑あり。
㉓	小林授産場（牛丸町） 1894 年（明治 27 年）64 歳	小松原の施設が手狭となり移転。
27	大阪市立弘済院 1912 年（大正元年）82 歳	小林授産場を買収した「財団法人弘済会」の事業を引き継ぐ。
30	大阪市設北霊園（長柄墓地） 1913 年（大正 2 年）83 歳	次女酒井種子が建てた墓碑がある。
㉜	茶屋町 時期不明	居住。
33	宝塚聖天 1917 年（大正 6 年）死亡後	後継者の酒井栄蔵が「慈侠窟」を建立し銅像鋳造の木型を安置。

注）〇印の数字は具体的に特定できていない場所。

（写真左）堂島米市場の跡
（写真右）大阪市設北霊園「小林佐兵衛墓」



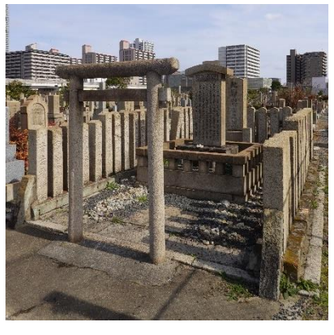
2023 年 3 月 25 日

「異色の社会事業家・小林佐兵衛の足跡」地図（２）

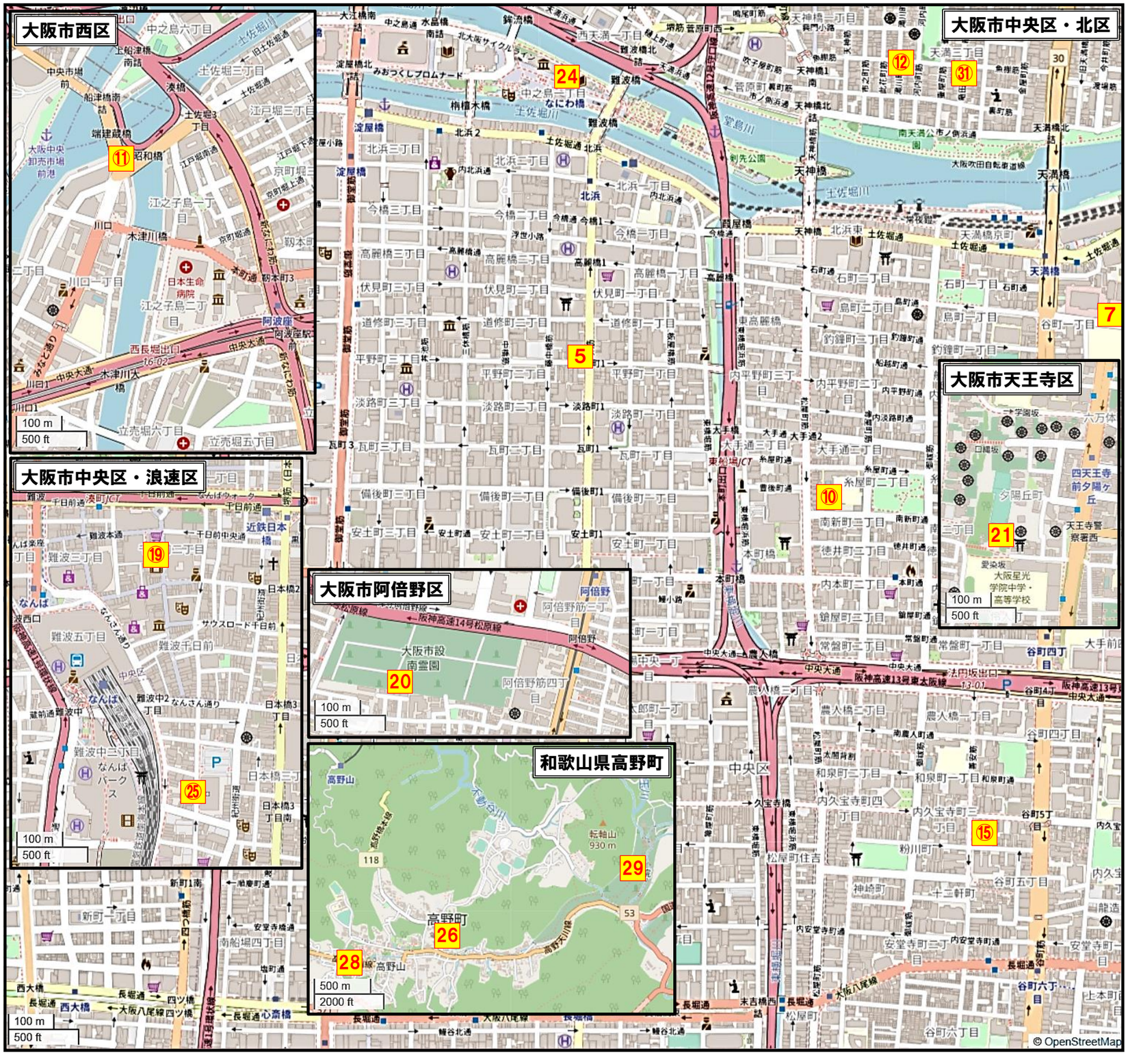
大阪公立大学　大阪検定客員研究員　高木 昌之

5	「茨木屋吉右衛門」 （平野町堺筋角） 1838 年（天保 9 年）8 歳	丁稚奉公に入る。
7	東町奉行所 1841 年（天保 12 年）11 歳	親孝行として二十貫文の褒美を貰う。 「東町奉行所跡」の石碑のみ残る。
⑩	松屋町牢獄 1852 年（嘉永 5 年）22 歳	入牢し公儀役人野々山平兵衛を救出。
⑪	尻無川番所 1863 年（文久 3 年）33 歳	播州小野藩一柳家の足軽頭に取り立てられ尻無川番所の見張り役を命じられる。名を小林佐兵衛と改める。「大坂船手会所跡」の石碑が近くに残る。
⑫	滝川町 1869 年（明治 2 年）39 歳	居住。付近に「旧町継承碑」あり。
⑮	救育所（粉川町） 1885 年（明治 18 年）55 歳	お救い所を継承した施設で、小林授産場に合併される。
⑲	南鏡園（千日墓地跡） 1888 年（明治 21 年）58 歳	庭園から長州志士の遺骨を掘り出し阿倍野墓地に改装。
20	大阪市設南霊園（阿倍野墓地） 1888 年（明治 21 年）58 歳	千日前南鏡園で長州志士の遺骨を掘り出し阿倍野墓地に改装。「死節群士之墓」を移設。
21	大江神社 1890 年（明治 23 年）60 歳	境内の大江護国神社に「舊山口藩殉難諸士招魂之碑」あり。
24	木村長門守重成表忠碑 1896 年（明治 29 年）66 歳	元大阪府知事・西村捨三と連名で発起人となり建立。
㉕	南地五階南手空地 1901 年（明治 34 年）71 歳	小林授産場支援を名目とした寄附相撲を開催。
26	高野山普門院 1903 年（明治 36 年）73 歳	銅像を小林遊園地から同寺庭園に移設。
28	高野山櫻池院 時期不明	高野山での菩提寺。 表門に建立した石碑が残る。
29	高野山奥の院 1913 年（大正 2 年）83 歳	普門院に移設した銅像を再移設。
㉛	龍田町 時期不明	居住。付近に「旧町継承碑」あり。

注）〇印の数字は具体的に特定できていない場所。



（写真左）東町奉行所跡

（写真中）大阪市設南霊園「死節群士之墓」

（写真右）木村長門守重成表忠碑